

413

43

非水百花譜

自第十一輯  
至第二十輯

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





水竹花譜

第十二輯

大正  
12. 5. 7  
東京

大正  
10  
四月



さるとりいばら (猿取茨)

學名 *Sinlax China L.*

異名 いぎんどう、いびつばら、うぐひすのさるがき、うまかたぐび、えびいばら

漢名 獲茨、獲莢茨

科名 百合科 (Liliaceae)

山野に自生する蔓性半灌木にして葉は帯黄に少しく赤味を有し細くして毎節少しづ、ゆがみ長さ四五尺に達す。又多くの刺を有し鋭き尖端を有するが故にさるとりいばらとの名を與せしなり。葉は卵形或は橢圓形にして節部に互生し、革質を呈して葉面には葉脈の變化せる二本の巻環を生じ以て他物に纏絡す。初夏の頃葉腋より花梗を生じ淡緑色の小花を繖形に開く。雌雄、株を異にす。花被は各々分離し雄蕊多数、亦分離す。子房の各室には又は二個の直生或は半倒生の胚珠あり。秋期に至れば豆大の球果を結び熟すれば紅黄色に色づきて極めて美麗、且つ食し得べし。又本種の地下部は藥用に供せられサルバルマンの製造に用ひ微毒治療藥を製せらる。葉は柳の葉に代へて餅を包むに用ひられ、若き葉はよく水に浸して惡汁を去り食用に供せらる。

備考

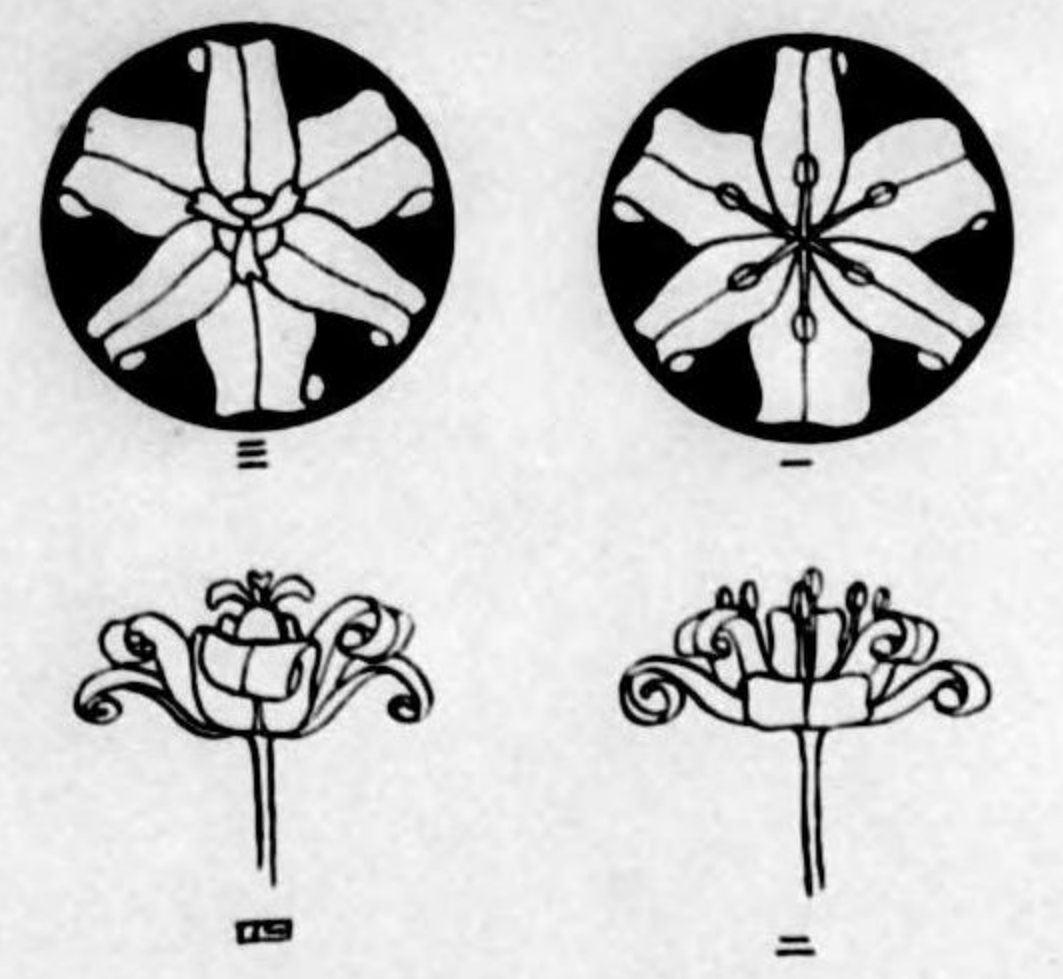
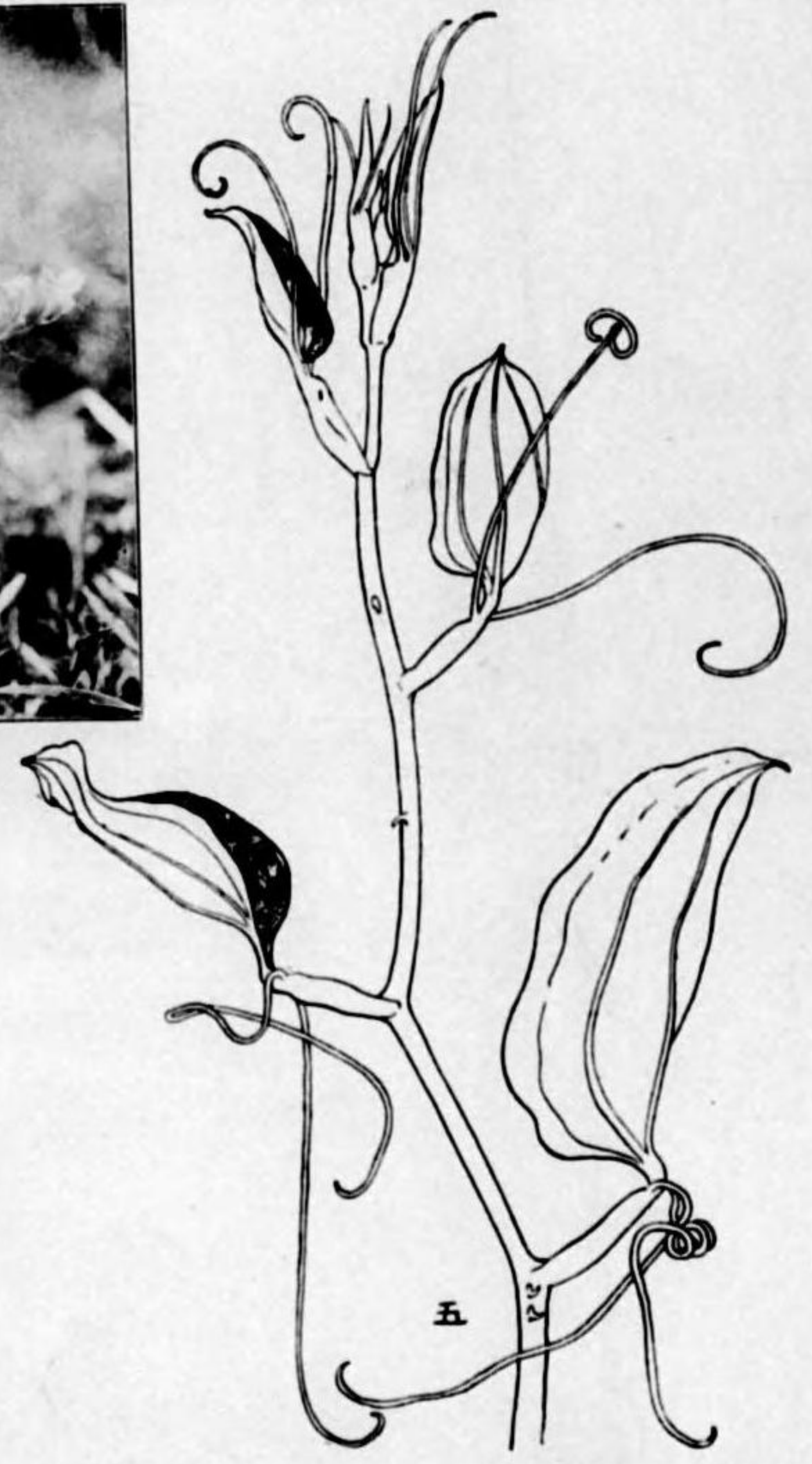
一、前記の他、次の數種の異名あり。

おぼろばら、かめいばら、からたち、かんだち、かんだちんばら、さるとりいばら、(はかつ)かんど、かえらばら。

本圖 大正九年十月十二日加賀片山津温泉場に於て寫生(自然大)

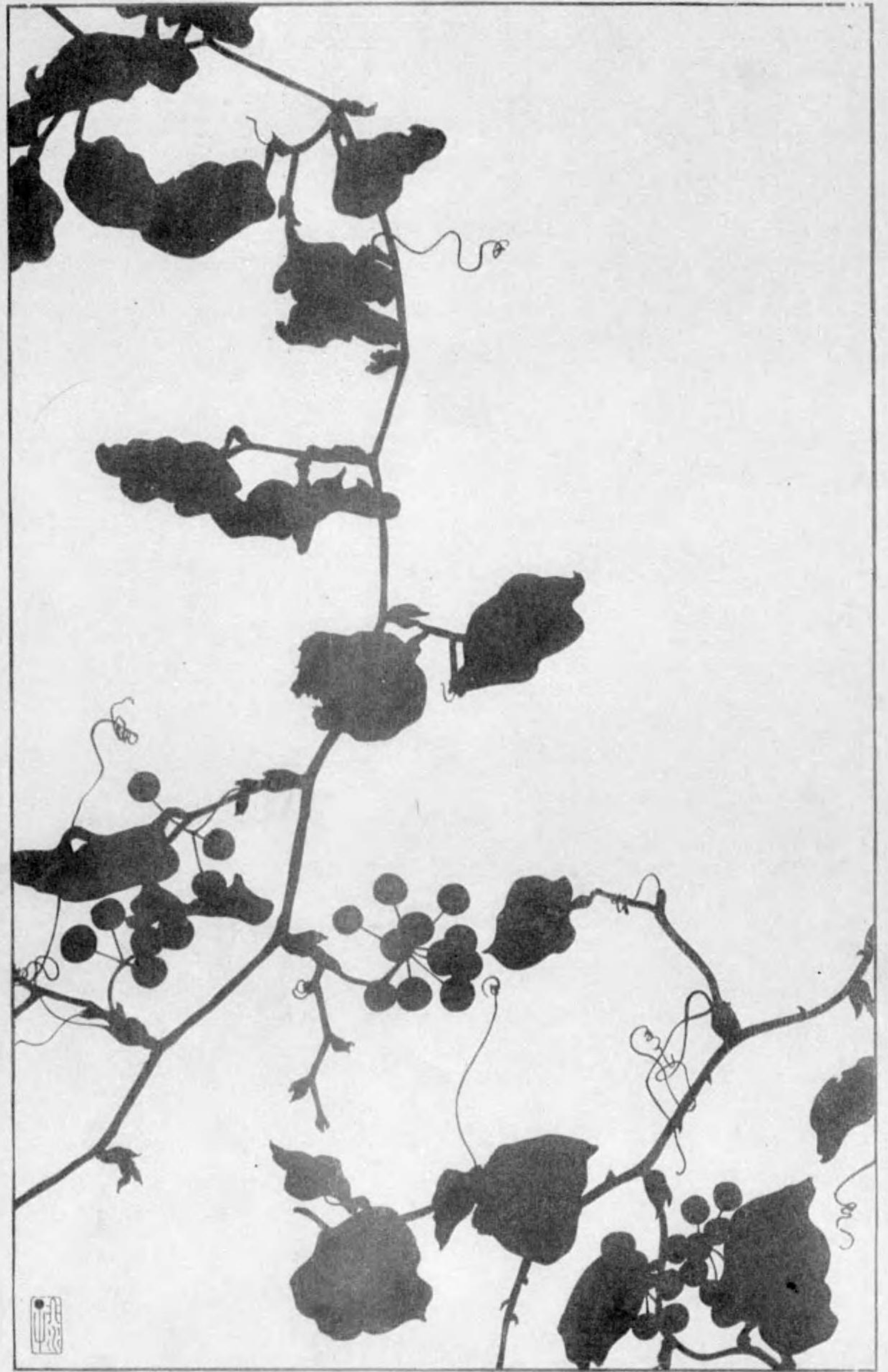
附圖 (一)雄花正面 (二)同上側面 (三)雌花正面 (四)同上側面 (以上擴大圖) (五)成長(自然大)

寫真 大正八年四月下總鴻ノ臺に於て田頭頭夫氏撮影(雄花)



非水百花譜第十一輯目次

さるとりいばら (猿取茨)  
 のほたちん (野牡丹)  
 くさふち (草薺)  
 こんぎく (紺菊)  
 うめばちさう (梅鉢草)



藤澤製薬株式会社  
 東京市中央区  
 丸の内一丁目  
 丸の内製薬株式会社  
 丸の内製薬株式会社

### のぼたん (野牡丹)

學名 *Melastoma candidum* Don.

漢名 野牡丹

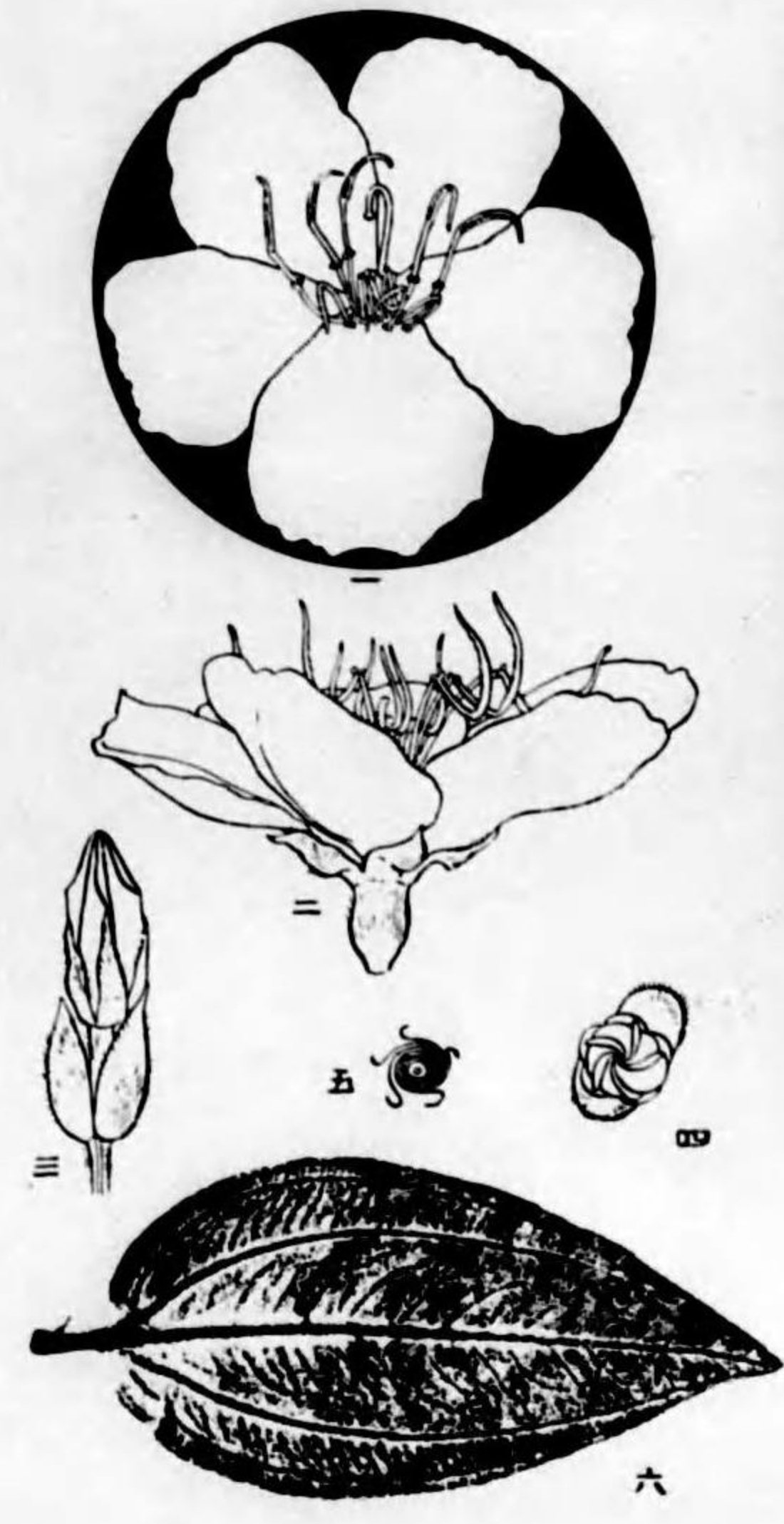
科名 野牡丹科 (Melastomaceae)

暖地に産する常緑の灌木にして草には兩個立維管束を有し、皮質部及び髓質部にも同心となして配列せる維管束群あり。葉は卵形又は短披針形をなし對生し托葉を有せず。而して數個の弓狀をなして平行せる主脈を有し全面微毛を以て蔽はる。  
 花期梢頭葉腋に美しき帯紅淡紫色の花をつく。花萼は倒卵形にして五個を有し各分離して雄蕊と共に鐘狀をなせる花托上に着生す。萼片五個、雄蕊は内向し多數にして凡て同長なり。約は二室にして外向し概ね頂端にて開口し、花絲は幼時上部に於て内曲するが故に約は子房と萼筒との間に挿入せらる。子房は合着せる心皮より成り多少筒と合着し數室を有して中軸胎座上に無數の胚珠を有す。果實は多少萼筒によりて包まれ、不規則に裂開する漿果にして肉質中に多くの種子を有す。種子には小なる胚ありて肉質の子葉を藏し胚乳を有せり。

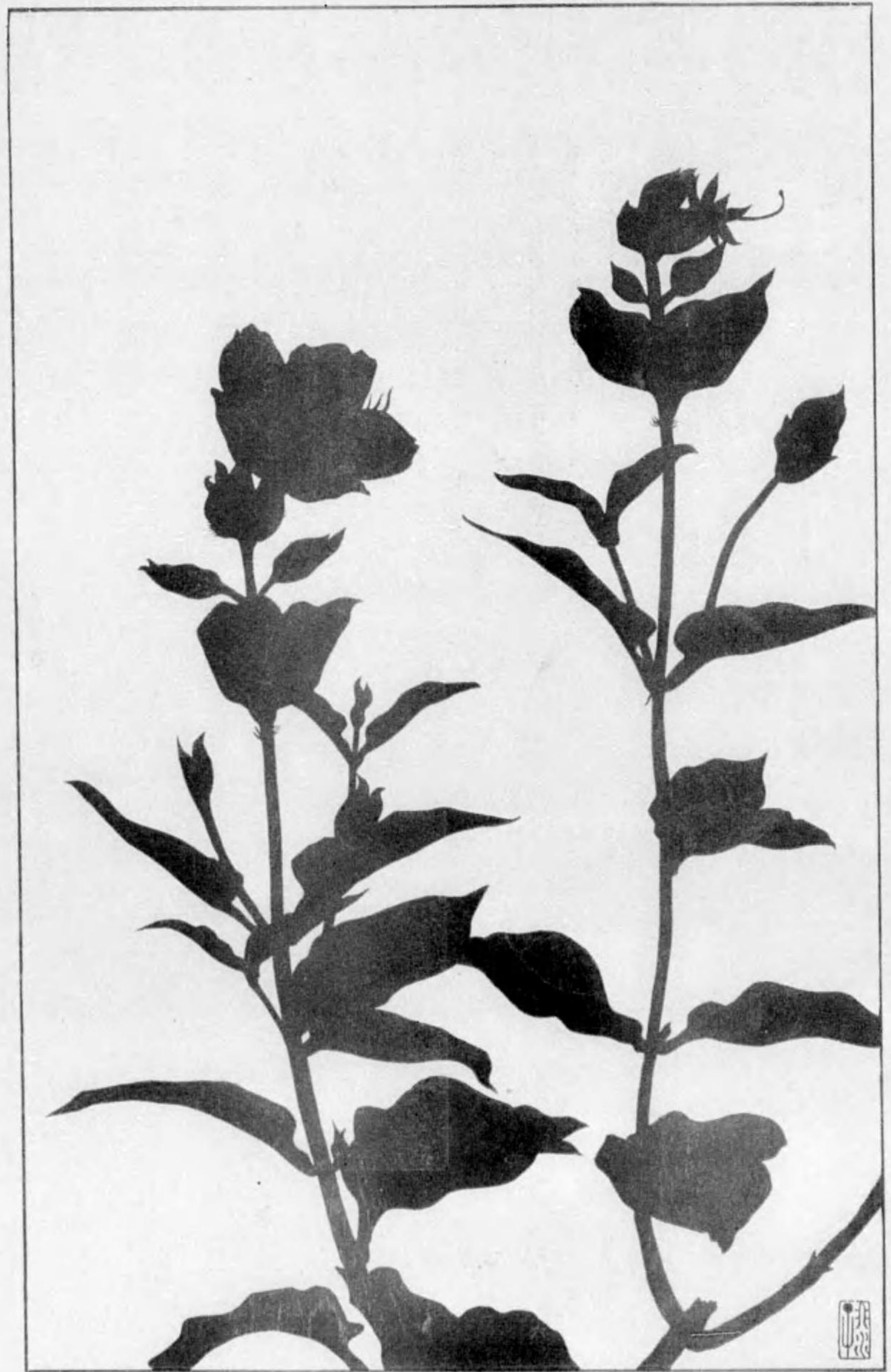
備考

一、學名なる *Melita* は黒色を意味し *zema* は口を表はす。之れ本屬中食用し得べき果實が紫黒色を帯びて之を食せば口唇に色づくが爲に名付けられしものなり。

一、園藝品は改良せられて野生のものに比し花大きく、且つ鮮かなる濃紫色を呈せり、本圖及寫真は園藝品を蒐載せり。



(大然自)生寫て於に京東日四十二月八年九正大 圖 本  
 畫(五)面上帶(四)側帶(三)側側の花(二)面正の花(一) 圖 附  
 (大然自部全上以)葉印(六)面附畫  
 影撮者著て於に京東月八年九正大 黃 寫



野 杉浦非亭  
 丹 住 氏 著  
 大正八年十月  
 東京 帝國書局發行  
 四國興業社

くさぶち (草藤)

學名 *Vicia Cracca* L. var. *japonica* Max.

異名 ゑんとうさう

英名 Tuffel Vetch.

科名 豆科 (Leguminosae)

原野に自生する蔓性多年草本にして二三尺に生育し、莖は線條小りて圓形をなす。葉は偶數羽狀複葉にして多く十對よりなり頂生せる小葉は分岐せる卷屈に變化して他物に卷纏す。葉の基部には披針狀或は三尖裂くる托葉を有し、各小葉は全縁にして橢圓披針狀をなせり。

初夏の頃より各葉腋に花梗を出し淡紫色の蝶形花を互生して總狀花序に開く。一個の花は凡そ三分程の小なるものなれど、多數散生して穗狀をなし開花するが故に頗る美麗なり。花瓣は幼時覆瓦狀をなし下向重疊の位置を取り又下部の花は上部のものが開花するに至る頃には受精結實し漸次紅色を呈す。雄蕊は旗瓣に向ひて生じ、其の數十個、中一個は分離し他は合一す。

莢形アルファダ、カマ (Vicia amourea Franch. var. *lanata* Fr. 等) に似たれど之より小なり。本種の種子は家畜の飼料とし又莖葉は家畜の飼料として重用せらる。

備考

一、本種は伊吹山麓に多しと云へり。

本圖 大正八年十月二日安房太海村に於て寫生 (自然大)

附圖 (一) 印葉 (二) 花正面 (三) 花上面 (四) 花背面 (五) 花側面 (以上全部自然大)

寫眞 大正八年十月安房太海村に於て著者撮影



三



二



五



四







こんぎく (紺菊)

學名 *Aster trinervius* Bosh. var. *congestus* Fr. et Sav.

漢名 馬蘭

科名 菊科 (Compositae)

田野に数多生する宿根草にして高さ二三尺に達す。葉には乳管を有する事なけれど往々離生の樹脂道あり。葉は卵圓形にして尖り鋸齒深く、粗縁にして三天脈を有し互生す。秋期梢上多数の枝を分岐し多くの濃紫色の花を頭状花序をなしてつく。花色の濃さにより紺菊の名を生ぜしものにして、花は幾分小さく、萼の變形せし冠毛を有す。而して外部の花と中心花とは自ら異り、外部のものは一列長形の舌状花なるに中心花は筒状花冠をなし且各自異りたる色彩をなせり、冠毛は無数の剛毛よりなり往々外方のものは分離せる小鱗片となる事あり、萼の基底は切斷形をなし之より花縁に着生し、又花柱の分枝には針狀の附属物あり。散形ヨメナ(鶏兒腸)に類し往々識別に苦しむ事あれど本種はヨメナに比し(一)莖葉粗縁、(二)花枝の分岐多く、(三)花色濃く、(四)花葉小さく、(五)花数多く、(六)冠毛を有するの差あれば容易に區別するを得べし。花の美しさに依り園圃に栽植せらる。

備考

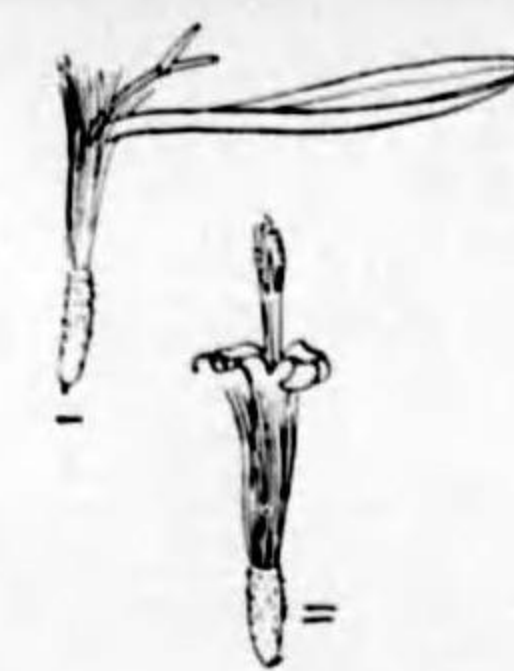
一、本種の紺菊なる名は園藝品に用られたるものにして野生のものはノコンギクと稱するを可しと牧野富太郎氏は云ひ、ノコンギクには新に *terram* *Horatensis* *Makino* なる學名を與へられたり。  
 一、本種及寫真は野生種のものなるが故にノコンギクなるべけれ其便宜上ノコンギクの名稱のもとに掲載せり。

本圖 大正八年十月四日安房本海村に於て寫生(自然大)

附圖 (一)舌状花 (二)筒状花 (三)上面より見たる頭状花 (四)同上側面 (五)冠毛 (六)冠毛の群

(七)(八)印葉 (九)(十)(十一)は擴大圖他は自然大 (五)(六)は十二月十五日寫生

寫真 大正九年十月加賀那谷寺附近に於て著者撮影







うめばらさう (梅鉢草)

學名 *Parassia Palustris* L.

異名 ばいくわさう

英名 Grass of Parassus

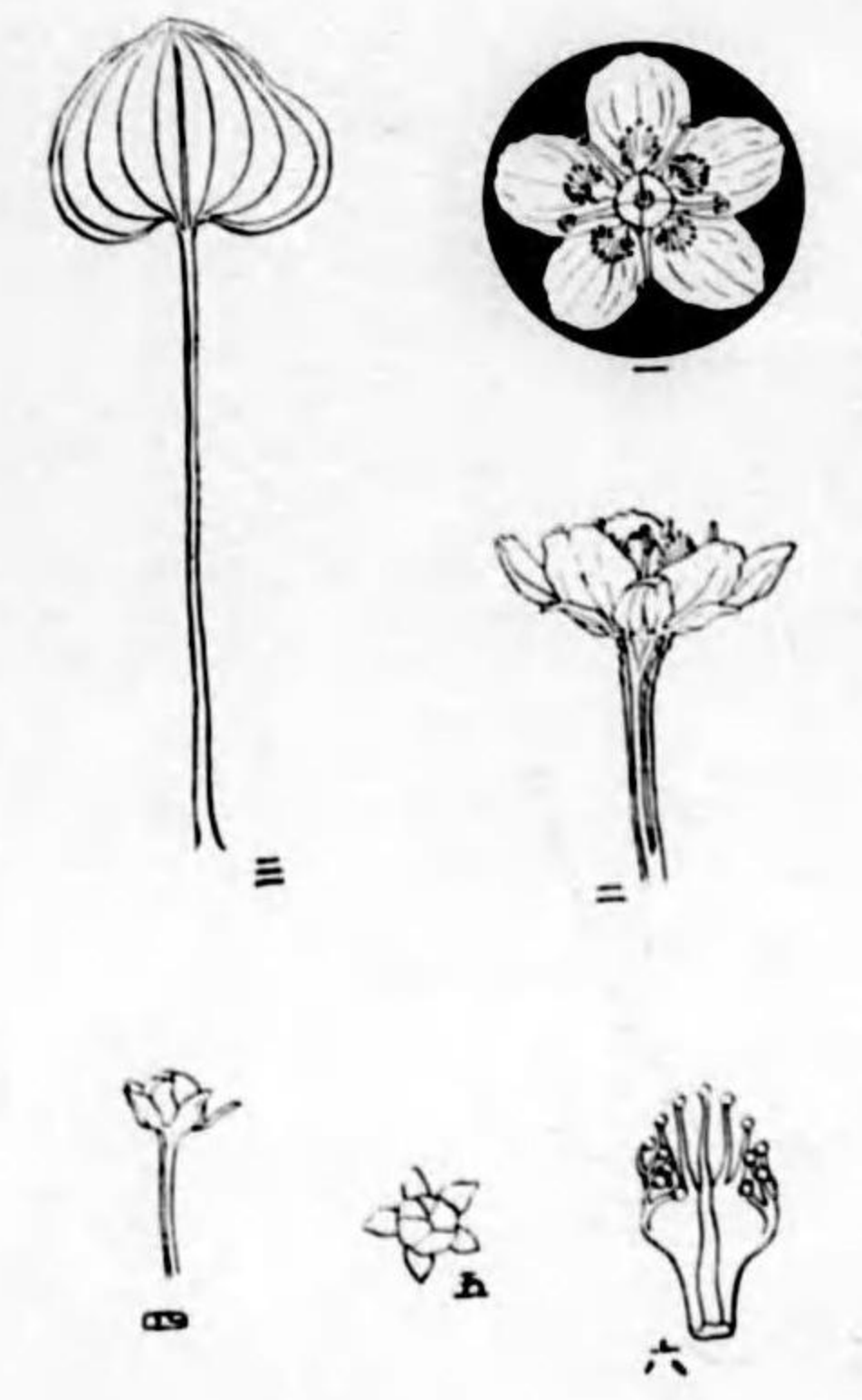
科名 虎耳草科 (Saxifragaceae)

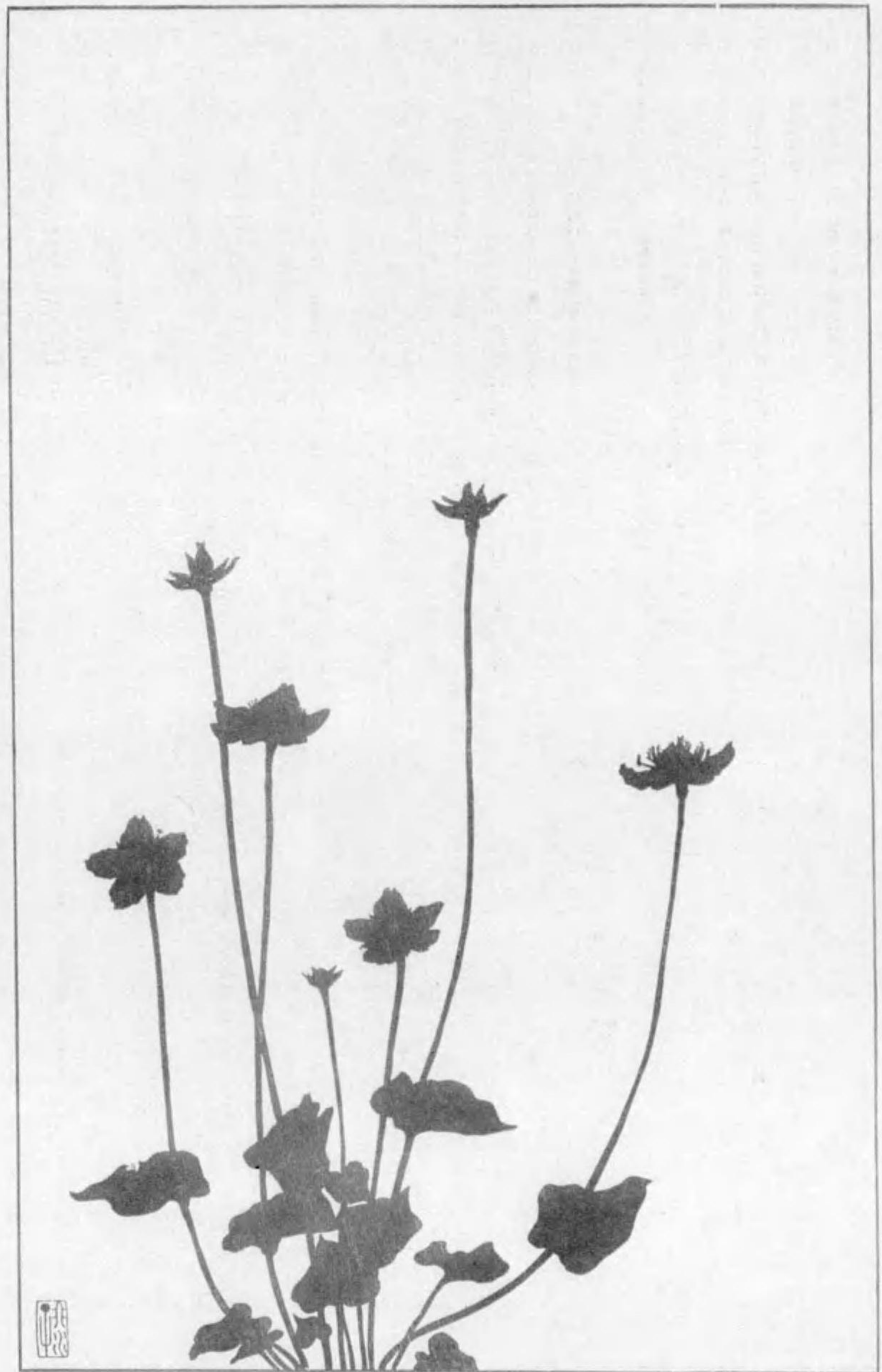
山野の陰地に自生する多年生草本にして高さ六寸位に生育す。葉は二種ありて一は根出葉、他は花莖に生ずるもの之なり。共に心臟形にして先端尖り、根出葉は長さ葉柄を有し、花莖に生ずるものは無柄なり。  
夏より初秋の候に至り葉間より一花莖を抽出し、其の頂端に一花をつく。花は白色の五瓣花にして各花瓣は卵圓狀をなせり、雄蕊は五個、花冠と互生し子房上に生ずれば花柱とは合一せず。且つ雄蕊と互生せる五個の蜜腺の片ありて、各片は先端に黄色の小球を具ふる數枝を有す。此の小球は蜜腺にして花蜜を貯ふる所なり。花柱は極めて短きか或は時に之を缺き、心皮は三又は四個よりなりて合着せり。果實は蒴果にして側胎座を有し、且つ三方至四片に裂開す。胚珠には二種皮あり。  
本種は花の美しきにより觀賞用として栽培せらるゝ事あり。

備考  
一、本種の學名 *Parassia* は本種がパルナクス山 (Mt. Parassus) に多數生するに依り命名せられたるものにて *Palustris* は沼又は澤を意味し本種の濕潤の地を好む事を現はせり。

本圖 大正九年十月十八日越後赤倉温泉場に於て寫生(自然大)  
附圖 (一)花正面 (二)花側面 (三)葉 (四)蕾側面 (五)蕾上面 (六)蜜腺を具ふる葉片 (六)は擴大圖  
他は自然大

寫眞 大正九年十月越後赤倉温泉地に於て著者撮影





梅  
藤  
草  
田口菊松樓  
藤陽堂  
行  
四國國城本以町京東

終